第３７回福岡県美しいまちづくり建築賞　受賞作品概要

総評

選考委員長　末廣　香織（九州大学大学院人間環境学研究院 教授）

今年で 37 回目を迎えた本賞には、「住宅の部」20 件、「一般建築の部」43 件の応募があり、多様な視点を持つ 8 名の選考委員によって審査が行われました。応募書類による 9 月の一次審査を経て、9 作品が現地審査に進み、リフォーム・リノベーション作品を対象とする福岡県建築住宅センター理事長賞候補の 3 作品も現地審査に進みました。現地審査は 11 月中に行われ、その後の最終審査を経て住宅の部 3 作品、一般建築の部 4 作品、理事長賞 1 作品の受賞が決定しました。

「住宅の部」の大賞を受賞した「道山さんの家/三角敷地の道と屋根」は、大きな通りに面した変形敷地に立つ店舗スペース付き住宅です。住宅地とはいえ周囲に対してオープンな建ち方をしていて、小さな庭のような駐車スペースも地域に開放されています。小さな屋根が複雑に重なり合ってできた外観は、仕上げ材の素材感や細やかなデザインもあって、親しみやすい表情を作っています。また内部空間は、小さいながらも様々に性格の異なる場所が立体的にくみ上げられていて、この住宅での楽しい暮らしがイメージできました。優秀賞を受賞した「岡垣の家」は、周辺敷地との関係を生かして屋内外を一体化させた空間が特徴的な住宅です。とてもシンプルな形の中に必要な空間を美しくまとめ、ディティールの隅々まで作り込んだ非常に質の高い作品になっています。同じく優秀賞を受賞した「casa Y」は、傾斜のある敷地をうまく使いながら居心地の良い空間をデザインし、隣接する親族の住む既存住宅との一体的な関係を作った住宅です。敷地に余裕がない中で、トップライトをうまく使って柔らかい自然光を導き、効果的な通風を実現した環境デザインも評価できます。現地審査に残った「ラジアル アンプ ハウス」も、非常に見所の多い美しい住宅でしたが、受賞には一歩及びませんでした。

「一般建築の部」の大賞を受賞した「福岡大名ガーデンシティ」は、何よりも福岡の中心部に誰もがいつでも利用できるオープンな公的空間が出現したことが、特にまちづくりの視点から非常に高く評価されました。隣接する旧大名小学校や周辺地域も含めて、公的領域と私的領域をうまく融合した、今後の魅力あるまちづくりへとつながることが期待されます。優秀賞を受賞した「宮前迎賓館　灯明殿」は、歴史ある神社に隣接する結婚式なども行える集会施設です。名前の通り、建物を覆うガラスの内側には障子が設えられており、夜には大きな灯明のような外観になります。バルコニーの手すり、照明器具、建具、左官壁などは、全てが伝統工芸の職人技を駆使して作られており、他にはない魅力的な空間となっています。現代のデザインと伝統を融合して職人技を伝承してゆこうという、関係者の強い思いが伝わってきます。奨励賞の「NOT A HOTEL FUKUOKA」は、住宅地に建つ小さなホテルです。樹木を植えた階段状のテラスを配置することで、北側の公園との一体的な関係を作り、閉鎖的になりがちなホテルに新しいイメージを提示したことが評価されました。同じく奨励賞の「KOGE LOOP ARENA」は、八の字状に施設内を巡るループが特徴的な、町民のための体育館です。このループは、外観では公園と建物を連続させ、内部ではジムやカフェなどの諸室とアリーナを一体的につないでいます。現地審査に残った「医療法人慈光会　若久病院」も、既存建物との関係を再構成して病院のイメージを刷新した印象的な建築でしたが、受賞には一歩及びませんでした。

「福岡県建築住宅センター理事長賞」を受賞した「九州工業大学 GYMLABO（ジムラボ）」は、古い大学の体育館を改修し、多様な使い方ができる開放的な大空間と、その周りの小さな個室を整備しています。大学と地域をつなぐ施設の運営手法も含めて、無理のないデザインができています。現地審査に残った「曳いて起こして故郷で暮らす家」は、伝統を継承した優れた古民家リノベーションでしたし、「UZUUZU MINE」は、新しいリノベーションまちづくりの手法を示した意欲的な取り組みでしたが、受賞には一歩及びませんでした。

大賞　住宅の部

「道山さんの家/三角敷地の道と屋根」

設計趣旨

　道山さんの家は福岡市の室見川にほど近い街に計画した店舗併用住宅です。 敷地形状はほぼ三角形で、中層マンションの立ち並ぶ大通りと住宅街のはざまにある鋭角な角地でした。元々は古い木造2階建てのご実家が建っていたのですが、この数十年で周りの風景も変わり、立地も良いことから将来貸し店舗を併設した住まいの設計を求められました。暮らしのイメージとしては街とのんびりとした連続感があり、人が気軽に集まり長居してしまうような居心地の良い家をご希望されましたが、幅員30mと幅員4mという両極端な2つの道路に面した角地であり、しかも三角形であるため敷地周長の2/3 以上が道路に接していました。あからさまに住宅の横に店舗があるのも、あからさまに住居の一部が店舗であるのもプライバシーが守りにくそうです。 そこでまず用途より先に大小の屋根がぱらぱらと分散しているような全体像をイメージしました。そしてその屋根の下にいろんな内外のスペースを内包するように計画しました。 平面形状がいびつであることから見る場所によって表情を変える複数の切妻屋根の連なる外観は、内部を想像されにくくしてご家族の暮らしを守るとともに、ダイナミックな軒先の変化が街ゆく人、子供達にとっても親しみのある存在になる事を目指しました。 とはいえ完成して2年が過ぎた現在、実はこの店舗スペースは未だ仕上げ未施工のまま、いつ貸し出されるのかはっきり決まっていません。おかげで下地剥き出しの土間空間はちょうどいい子供達の遊び場になっており、この家のほどよい余白空間として暮らしと街のあいだに存在しています。そのうち貸し出されるかも知れませんし、もしかしたらこのままの時間がしばらく 続くかも知れません。実はそもそも西側の駐車スペースは自家用ではなく、隣接する保育園の送迎用に無償で使ってもらうために計画しました。完成してみると近隣の街や社会にも余白を差し出し、貢献することのできるようなこの建築の佇まいや在り方は、まるで建主の人柄を表現しているかのようだなと思います。道ゆく人や子供達が気軽にこの屋根の下で道くさしたくなるようなそんな風景。家と街のあいだに。

大賞　一般建築の部

「福岡大名ガーデンシティ」

設計趣旨

地域の歴史と文化を継承しながら都市を新たなステージへ

　福岡市中心部における歴史ある旧大名小学校の跡地活用事業である。計画地である旧大名小学校は福岡市で最も古い学校で、そのグランドは地域のイベントなど長く親しまれてきた場所である。一方で福岡市が進める都心部の機能向上を促す「天神ビッグバン」エリアの中で、市街化の進む天神地区と下町の雰囲気を継承する大名地区の境界に位置し、それぞれの地区文化をつなぐ西のゲートとして位置づけられる施設である。

歴史ある小学校跡地を活用したクロスカルチャーの拠点

　求められた校庭の保存を都市に開かれた広場「パーク」として再生し、オフィス・外資系ホテル・商業等を積層した「タワー」と、住宅と創業支援施設に地域の公民館などを加えた「テラス」などから成る複合施設である。大名地区の個性ある地域文化と開発が進む天神地区それぞれの新たな人の流れが囲われた広場で混ざりあい、新しい福岡の異文化交流拠点となることを目指した。

まちの特徴を活かした施設配置

　大規模な建築物が多い天神地区と低層で下町的な大名地区や旧小学校校舎を、広場「パーク」が結節点となり、大小のまちのスケールと人や時の流れを違和感なく連続させ、都市の多様性を融合することができた。福岡大名ガーデンシティは、開かれた広場「パーク」を核に様々な人の交流と憩いの空間を創出し、都心の広場のありかたを創出している。

優秀賞　住宅の部
「岡垣(おかがき)の家(いえ)」

設計趣旨

博多と北九州のちょうど中間に位置する遠賀郡岡垣町に建つ医者とカウンセラー夫婦と子供2人のための住宅である。敷地は、長閑な田園風景が広がり、自然豊かな環境の中で子育てをしていきたいという想いからこの地を選び計画がはじまった。近くに奥様のご実家があり、色々と参考にさせて頂く要望があった。彼女は、物心ついた頃から実家の軒先にて雨や雪の日でも七輪を出してきて半屋外食を楽しむ習慣があり、カジュアルなアウトドア活動ができる空間を強く望んでいた。また、実家には昔ながらの2間続きの和室があり、そこを中心に生活をしている中で家族との距離感というものを強く意識されていました。プライバシー確保はされながらも、どこか家族の気配を感じることができる住環境にしていきたい。また、季節によって移りゆく田園風景をより身近に感じる為に、カーテンをしない生活も望まれていた。基本的な構成は、キッチン、水回り、寝室、多目的室、書斎、収納と機能をもったスペースを壁で囲み、適度な距離を保ちながら配置を行い、それぞれの隙間スペースを家族共有のスペースとし、客人を招きいれるに相応しいパブリック空間とした。多目的室は、奥様が今後カウンセリングの仕事も家で行いたいということで、子供が小さいうちは、多目的室をカウンセリングルーム（現在別敷地でクリニックとカウンセリングは計画中）として使い、子供が思春期となった頃には、子供部屋、その後は、倉庫などとして家族の変遷に合わせて柔軟な対応ができるような配慮を行った。水回り以外の空間は天井を設けず、壁のみで仕切られた一体化された空間でもある。氷点下にもなる寒い日には、床下にルームエアコンを設置した床下暖房と薪ストーブを活用するだけで快適に過ごせるよう、床下換気扇やサーキュレーターなども活用しながら空気の流れも考慮した空調計画を行った。東西に伸びる切妻屋根の隙間や各諸室の隙間から感じる、変わりゆく自然の変化を五感で感じながら感性豊かな暮らしを楽しんで欲しいと切に願う。

優秀賞　住宅の部
「casa(カーサ) Y(ワイ)」

設計趣旨

敷地は建主一族が代々暮らしている土地の一角で、時間をかけて手入れされた中庭と高床の蔵で繋がっている。集落的な越境性や共有の裏動線でできた回遊性を継承しつつ、多様性を併存させる懐と多様な顔をもつ住まいにしたいと考えた。まず、既存の地形を住宅全体で感じられるように緩やかな段状の床とし、その中央に生活の拠り所となる2つの塔屋空間（寝間と居間）と、その周縁に生活を補完し外部環境と接続する回遊性をもった下屋空間を計画した。この塔屋と下屋の構成は、構造的には大壁で囲われた耐力壁と、着色した90角の柱・梁によるリズミカルな真壁の開放的な非耐力壁に対応し、環境的には開口部を風と光で役割分担し、風は下屋の壁面のウィンドキャッチャーで室内に取り込み、光は塔屋の天窓から断熱材と垂木で拡散された間接光で居住空間に天気の変化を伝える。多中心で重層性のある空間に、多様な対比関係から生まれた場所が渾然と併存することで、身体と住まいがシンクロし、室に固定されることなく常に野生的ななわばりの伸縮が可能となる。この住宅は住まい手の日々の居場所の発見の連続によって柔軟にかたちづくられていく。

優秀賞　一般建築の部

「宮前迎賓館（みやまえげいひんかん）　灯明殿（とうみょうでん）」

設計趣旨

　博多の歴史を留める旧市街の中心地での集会施設である。天神や博多駅周辺で進むモノ的発展に包囲されながら、いかに歴史を捉えるかということが、自ずから命題となるような敷地である。櫛田神社北神門の脇、民間が3/4、櫛田神社が1/4を分割所有する地での共存計画でもある。

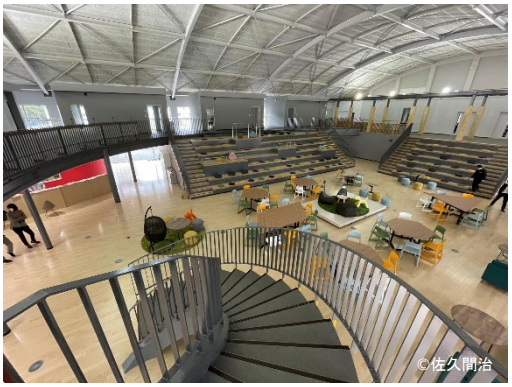
　容積率を使い切る建築ボリュームが計画の前提となりつつも、いかに、境内への尊厳を表すか。そこから、建物全体が「灯明」となり、日々の営みが神仏に灯火をささげる、という初案によって、まずは関係者の意識を束ねることができた。そして、将来的にも安定した景観を持った神社境内の建物群の形状を、現代建築として編集し反復することによって、場所（空間）との一体的な風景を図った。

　また、櫛田神社の周辺は市内最大の職人まちとしての歴史が積み重ねられてきた。この地区から実際に職人さんを起用して建築をつくることは、もはや叶わぬが、可能な範囲まで広げて（市内～県内～九州内）、個人の技能で生き続ける職人さんたちに集まってもらい、あくまで現代構法の現代建築に彼らの造作物を組み込んだ。今は見えない地歴との一貫性をなぞらえる所作として、建築は作られた。

福岡県建築住宅センター理事長賞

（リフォーム・リノベーション）

「九州工業大学（きゅうしゅうこうぎょうだいがく）ＧＹＭＬＡＢＯ（ジムラボ）」



設計趣旨

　九州工業大学ＧＹＭＬＡＢＯ（ジムラボ）は、1965年竣工の旧体育館を産学官民・共創のためのコーワーキングスペースに教員学生職員が中心となって企画・計画・設計リノベーションしたもので、以下の点が空間デザイン上の大きな特徴である。

1.閉鎖的な体育館を開放的な緑のコーワークスペースに再生

　飛梁構造の特徴を活かして外壁１階の一部を撤去し、開口部にすることで、閉鎖的な体育館を内外空間が連続する緑豊かなコーワークスペースに改修した。建築とランドスケープを一体的にデザインすることで、キャンパスの豊かな緑を借景として内部に取り込みながら、内部活動を外部へ見える化している。

2.黄金螺旋の線形を活かした２階吹抜空間の増床により、産学官民の交流を誘発する立体的で多様な居場所を創出

　高い天井とフラットな床の旧体育館に、黄金螺旋（既存施設平面で使用されていた黄金比を踏襲）の線形を活かした2層の吹抜空間をつくり、その上下を、大階段、螺旋階段、ベンチ、ステージ等で有機的に繋ぐことで、産学官民の多様な交流を誘発する立体的で多様な居場所を創出している。

3.敷地周辺に点在する近現代建築群の散策拠点として活用できる、地域に開かれた新しい大学キャンパス施設としての役割

　本施設は、キャンパスから夜宮公園へ続く、明専の森と称される近現代建築群が点在する地区のほぼ中心にあるため、県民にとって、優れた地域資源としての近現代建築群（旧松本家住宅、旧安川邸、九工大・記念講堂等）を繋ぐ回遊拠点としての機能も併せもっており、地域に開かれた新しい大学キャンパス施設の象徴的役割も果たしている。